

『雜阿含』*Devatāsamyukta と Devatāsūtra の展開

—Ratnāvadānamālā 第八章の成立—

榎 本 文 雄

Saṃyuttanikāya (=SN) の Sagāthavagga はその劈頭に Devatāsamyutta と Devaputtasamyutta という名の二つの章¹⁾をすえているが、『雜阿含經』『別訳雜阿含經』(Saṃyuktāgama)の中にもこの両章に対応するものが含まれている。いまそれらを *Devatāsamyukta (=DSa), *Devaputrasamyukta と呼んでおく。この両章は次の二点で区別される。まず、前者、DSa には名前のない『天子』(devatā, 神)が登場するのに対して、後者には名前をもつ『天子』(devaputra?, 神々の一員)が登場する。第二に、前者、DSa では經の末尾に『天子』の説く以下の偈が必ず付されているが、後者にはそれは見られない。

久見婆羅門 速得般涅槃 一切怖已過 永超世恩愛 (大正 2. 153c, etc.)

ところで、最近、Devatāsūtra (=Ds) と Alpadevatāsūtra (=Ads) というギルギット出土の梵文テキストが公表されたが²⁾、その名称からしてそれらは先の DSa と関連することが予想される。事実、後者の Ads は Dsa に属する『雜阿含經』(=SA) 1299 經や『別訳雜阿含經』(=SAs) 297 經に一致し、本来は DSa の中の一經であったと考えられる。他方、前者の Ds も、現存の SA や SAs に相当經が見られないものの、DSa に特有な先の二点を備えており、さらに、そこには DSa の一經である SA 1291 經や SAs 289 經の韻文部に相当するものがそっくり収められている。したがって Ds も DSa の一展開と考えるべきである。

これまでの研究²⁾によって、Ds には三伝承(梵本、漢訳本、藏訳本)が存在すること、各伝承は偈の数や順序を異にすること、漢訳本(以下これの梵文原典として推定されるものをC本と呼ぶ)が最も古い形態を伝え、藏訳本(以下これの梵文原典として推定されるものをT本と呼ぶ)が最も増広されていること、T本におけるこの最終増広は DSa に属する SA 1010 經や SAs 237 經からの転用であるという以上の諸点が明らかにされている。さらに私見を加えると、C本に二偈増広されたものが梵本(=G本)の原型となり、そのうち偈の順序が大幅に乱れたものが現存のG本であり、G本の原型をほぼそのまま伝え、それに二偈増広したものがT

本となったという展開が浮かび上がってくる。

しかし、Ds の展開は以上に尽きるものではない。以上の伝承よりも一展発展したものが存在したからである。まず、Mahākarmavibhaṅga (=MKV, ed. S. Lévi) に、以上の三本のいずれにも収められていない偈が Ds として引用されている。しかも、MKV のこの引用偈は、敦煌写本中の Ds の蔵訳本のうちの二本にも含まれている。さらに、Ratnāvadānamālā³⁾ (=Rv, ed. K. Takahata) の第八章、Devatāparipṛcchāsūtra (=Dp) に Ds の T 本にあたるものがそっくり転用され、そこには MKV 所引の偈も含まれている。以下、Dp を検討してみる。

Rv は、Avadānaśataka から一定の方針のもとにアヴェダーナを抜き出して詩形に改めたものに、ウバグプタ長老がアショーカ王に物語るという枠組を与えたものである。ところが、Dp にはこの枠組は備わっているものの、Avadānaśataka の中に対応するアヴェダーナが存在しない。また、その内容上からも、Dp はアヴェダーナとはいいい難い。したがって、Dp は、Rv が成立した後に付加された可能性が強く、それは、章題自身が示すように、Ds からの転用であろうと予想される。以下にこの点を確認するため Dp の中核である devatā と世尊との問答を考察してみる。(Dp は devatā の質問部と世尊の応答部とを切り離しているが、ここでは便宜上、問答ごとを一括して考察する。また、紙幅の関係上、要点のみを記す。)

まず、DSa に属す SA 997 経、SAs 134 経や SN 1. 5. 7 に当たる問答がくる。

ke narāḥ sugatiṃ yānti	ke narāḥ svargagāmināḥ /
keṣāṃ cāpi divārātrau	sadā puṇyaṃ pravarddhate // (23)
ārāmāropakā ye 'tra	ye ca vā setukārakāḥ /
prapātodakayānaṃ ca	pradadanti pratiśrayam // (42)
śraddhāśīlena satyena	kṣamayā vītamatsarāḥ /
te narāḥ sugatiṃ yānti	te narāḥ svargagāmināḥ // (43)
teṣāṃ eva hi martyānāṃ	divārātrau nirantaram /
avicchinnaḥ puṇyadhārāḥ	pravarddhante sadā khalu // (44)

この問答には、他に多数のパラレルがあり、その中で『摩訶僧祇律』(大正 22. 260c-261a) に引用される偈が Dp に最も近い。

Dp では、この問答からの増広と思われる問答をはさんで、SA 998 経、SAs 135 経や SN 1. 5. 2 に相当する問答がつづく。これの一部に相当するものが MKV pp. 89, 94 に Ds として引用され、敦煌写本の蔵訳 Ds のうち、ペリオ本の No. 103V と No. 731 にはこの問答がそっくり収められている。

(89) 『雑阿含』 *Devatāsamyukta と Devatāsūtra の展開 (榎 本)

kiṃdado balavāṃ syāc ca kiṃdadaś ca praśobhitaḥ /
kiṃdadaḥ sukhito lokaḥ cakṣumān api kiṃpradaḥ // (25)
annado balavān bhogī vastradaḥ śobhito bhavet /
yānadaḥ sukhitaḥ tṛptaś cakṣumān bhavati dīpadaḥ // (48)

これに続き、Ds の T 本と、偈の数や順序ともほぼ一致する問答がくる。紙幅の関係上、原文は掲げられないが、細部の読みにおいて CTG のいづれとも異なる場合が屢々見られる反面、G 本の読みを補う場合もある。なお、次の二偈は T 本にのみ含まれ、SA 1010 経、SAs 237 経に相当する。

kenāyaṃ badhyate lokaḥ kena loko vimucyate /
kasyeha viprahāṇena nirvāṇam iti kathyate // (34)
icchayā badhyate loko nīcchayā ca vimucyate /
tṛṣṇāyā viprahāṇena nirvāṇam iti kathyate // (57)

最後に、SA 1309 経、SAs 308 経や SN 1. 8. 1 などに相当する問答がおかれる。ここでも、Dp は SA, SAs, SN のいづれともかなり異なる読みを示す。

kiṃ nu hatvā sukhaṃ śete kiṃ ca hatvā na śocati /
kasya caikasya dharmasya vadhaṃ saṃśasi Gautama // (38)
krodhaṃ hatvā sukhaṃ śete krodhaṃ hatvā na śocati /
krodhasyaikasya dharmasya vadhaṃ saṃśāmi sarvadā // (61)

こうして問答を終えた devatā は次の偈を唱えて天界に戻る。これは DSa や Ds の末尾の偈に相当する。

vīrasya ca na paśyāmi brāhmaṇyaṃ parinirvṛtim /
sarvavīro bhayātītas trātuṃ loka 'bhiśaktībhāg // (64)
cirasya bata paśyāmi brāhmaṇyaṃ parinirvṛtaṃ /
sarvavairabhayātītaṃ tīrṇaṃ loka viśaktikāṃ // (Ds G 23)

両者にかなりの異同が認められるが、それらは書写時における伝承の混乱による所が大きいと見られる。ともかく、この偈が Dp の問答全体を締めくくっているという事実は、Ds、ひいては DSa の展開という意識のもとに Dp が形成されたことを示唆する。

以上、Dp は、T 本にも見られた DSa による増広が一層推し進められた発展形として、Ds の R 本と呼ぶことができよう。また、MKV に引用された Ds も、全貌は不明であるが、R 本のように発展した形態をもっていたと推測される。さらに、敦煌写本の Ds にも、抄訳や抄録の疑いはあるものの、T 本と伝承を異に

し、R本や MKV 引用本に近いものが存在することも明らかになった⁴⁾。なお、R本は、細部の読みにおいて G本や SA などの根本説一切有部系の伝承と一致せず、むしろ大衆部の『摩訶僧祇律』の伝承に近い場合もある点は、MKV やその註釈書の引用経典は説一切有部系のものではないという報告⁵⁾と相まって一層の研究を要請するものである。

1) この両章は、Sagāthavagga 中の古層に属し、ジャイナ経典との共通伝承も多く、未指摘のものに SN 2.3.2 と Uttarajjhāyā (=Utt) 5.14-15 とのパラレルがある。

Utt 5.15c に関しては、最近出版された梵語法句経 (ed. N. S. Shukla, G. Roth) の 112c に *bālo maccumukhaṃ prātto* とあるのが、仏典のパラレル中で Utt に最も近い。

SN 2.3.2 V. 4 *paṭigacc' eva* (前もって) については、J. Brough; *The Gandhāri Dharmapada*, p. 278 に詳しい。そこに指摘されているように、仏教梵語の *pratikṛtyaiva* や *pratiyatyeva* がこれの対応形である。ちなみに、Mūlasarvāstivāda Vinaya Civaravastu (ed. N. Dutt) p. 86.10 に *pratipady eva* と校訂され、写本には *prati-patyeva* とあるときれるが、近年刊行された Raghu Vira and Lokesh Chandra; *Gilgit Buddhist Manuscripts*, Śata Piṭaka, vol. 10, part 6, 159a8 の写真版によって明らかなるように、*pratiyatyeva* と本文を訂正すべきである。したがって、この箇所を論じる F. Edgerton; *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, p. 364, 右欄, 11-18 の記述も是正されねばならない。また、Abhidharmakośabhāṣya (ed. P. Pradhan) p. 72.3 や Abhidharmakośavyākhyā (ed. U. Wogihara) pp. 164.16, 165.28 にも *pratipatyeva* (*pratipady eva* という写本もある) とあるが、Abhidharmakośavyākhyā が *pūrvam eva* と言い換えている点からも *pratiyat(t)yeva* が本来の形ではないかと推測される。

2) A. Mette; *Zwei kleine Fragmente aus Gilgit*, *St II 7*, p. 139ff., 松村恒「Devatāsūtra と Alpadevatāsūtra」(『印仏研』30-2, p. 988ff.)。また、拙稿「雑阿含 1299 経と 1329 経をめぐって」(『印仏研』30-2, p. 957ff.) や CAJ 26, p. 225ff. も参照。

3) このテキストの題名ならびに成立については、岩本裕『改訂増補 仏教説話研究序説』pp. 169-179 に詳しい。なお、The Institute for Advanced Studies of World Religions 所蔵のマイクロフィルム No. MBB-II-17ff. にも Rv が含まれ、それに従って Takahata 校訂本の読みを正す場合もある。

4) 敦煌写本の Ds については、ペリオ本の No. 103 V と No. 731 がほぼ一致し、ペリオ本の No. 732 がスタイン本の No. 370 III に近い。

5) C. B. Tripāṭhi; *Karmavibhaṅgōpadeśa und Berliner Texte*. WZKSO 10, p. 208ff. (京都大学助手)